

九州新幹線の全線開業がもたらす 「大交流時代」のまちづくり

活火山・桜島とともに生きる 60万人都市

今年に入ってから噴火活動が活発になり、1月26日以降、52年ぶりといわれる爆発的噴火（本格的なマグマ噴火としては300年ぶり）を繰り返している新燃岳（鹿児島・宮崎県境）の様相は、この記事を書いている2月初旬の段階でまだ予断を許さない。

今後は宮崎県側への大量の降灰に伴う土石流などの被害が心配される。現時点においても、関連自治体の交通機関の混乱や風評被害による観光客の減少が早くも深刻になりかけている。火山国日本の宿命とはいえ、一刻も早い終息を願うばかりである。

今回の新燃岳の爆発的噴火に際し、国や県の対応に先んじて、いち早く支援に動いたのは鹿児島市だった。宮崎県側への降灰が盛んになり始めた1月29日には、森博幸鹿児島市長の迅速な決断により、鹿児島市が所有する

路面清掃車や散水車などの降灰専用車両計13台および専門の作業員を都城市と日南市に派遣。灰の除去作業を開始している。降灰除去専用車両を持たない（これまでその必要がなかった）都城市や日南市にとって、桜島による降灰被害を長年にわたって経験し、その対策を熟知する鹿児島市の支援は物心ともに非常に心強いものだっただろう。

トップニュースとして全国一斉に報じられた新燃岳の最初の爆発的噴火が起きたのは、実は市政ルポの取材前日のことだった。そのため市長インタビューはまず「いやあ、驚きましたね」といって森市長の一言から始まった。

「桜島の噴火は日頃、間近に体験していますが、まさか新燃岳がこんな大規模に噴火するとは思っていませんでした」

しかも森市長は取材前日、全国市長会の委員会出席の後、空路で鹿児島に移動中、窓から新燃岳の噴煙を遠望したという。「羽田から鹿児島へ向かう飛行機は通常、新

燃岳の上空を通るので。今回は噴火の影響で大きく迂回し、

大隅半島上空をぐるっと回る形になりました。

窓からはちょうど新燃岳と桜島の2つの噴煙が見えました。こういうダイナミックな自然環境の中に、人口60万人の鹿児島市はあるのだということを、改めて実感しました」

鹿児島市のシンボルであり、従来から噴火を繰り返してきた火山といえば、言うまでもなく桜島の存在が知られる。記録に残っているだけでも30回以上の大噴火を繰り返してきた桜島は、近年、小規模な噴火活動を活性化さ



もりひろき
森博幸
鹿児島市長

せている。昨年にはついに、観測史上最多となる年間896回もの噴火を記録。その多くが爆発的噴火であるという。

ところが森市長は、新燃岳の爆発的噴火と降灰による宮崎県側の混乱に深い同情の念を寄せつつ、地元・桜島の状況に関しては恬淡とした態度を崩さない。桜島の噴火活動がいかに鹿児島市民にとって「常態」であるかが、そのことから如実に分かるのだ。

それは歴史的事実からもうかがえる。例えば平成21年に放映され、全国的な人気を呼んだNHK大河ドラマ『篤姫』の主人公・篤姫が



鹿児島市のシンボル・桜島

將軍家定のもとに輿入れする際、故郷の風景が描かれた掛け軸を持参した。その中の一つ、風光明媚な錦江湾の山水画には、桜島から上る噴煙がちゃんと描かれているという。そのような目で見るせいだろうか。ここ数年来の桜島の噴火活動の急激な活性化は、火山活動としての危険性を思う以上に、現在の鹿児島市にみながる活気とどこか共鳴している現象のようにさえ思えてくるのだ。その活気の源泉はもちろん、3月12日に全線開業する九州新幹線・鹿児島ルートが存在にある。

着々と整う

「新幹線全線開業後」への布石

「九州新幹線・鹿児島ルート（博多～鹿児島中央。以下、九州新幹線で統一）の全線開業は、40年来的誘致運動を経ての成果です。多くの先人が努力されてきた結果であるということ



九州新幹線の新型車両「さくら」



幕末に英国留学した「若き薩摩の群像」の背後に観覧車が回る。新幹線時代の鹿児島市の新しい風景



九州新幹線の終始発駅・鹿児島中央駅

を、今に生きる私たちはまず感謝しなければなりません。その上で全線開業後のまちづくりを考える際に重要なのは、ほかにはない鹿児島市の特徴をいかに拡充し、発信していくかにかかっていると考えます（森市長）

新幹線全線開業の効果が真っ先に表れるのは観光面だろう。鹿児島市では新幹線全線開業を見据えた観光振興の指針として平成17年度に「鹿児島市観光未来戦略」を策定。端的にはここ数年来約800万人台で推移している観光入込客数を、新幹線全線開業効果で1000万人に引き上げることが目標にしている（そのうち宿泊客数は目標330万人）。

その実現に向けて、基本方針を「感動―魅力あふれる鹿児島の創造」「歓迎―ホスピタリティに満ちた鹿児島の醸成」「好感―鹿児島シティブランド戦略の展開」「交流―国際観光・広域観光の推進」と定めた。さらにほかに鹿児島

(鹿児島県)



鮮やかに緑化された市電軌道敷を練り歩くおはら祭の群舞

業をにらんだ準備は多彩かつ多角的に実施されている。

「同時に鹿児島市のホスピタリティを全国にアピールする存在として、まち歩きガイドや観光地ガイドを担う《かこしまボランティアガイド》の育成には特に力を入れております。また鹿児島市の市街地の動くシンボルともいえる市電についても、新型車両の導入や軌道敷の緑化事業を行い、既に市民・観光客から好評をいただいております」(森市長)

実際、今回の取材の最中にも市内のあちこちで、まち歩きガイドや観光ガイドを生き生きと実施中の市民ボランティアに遭遇した。



観光客に人気の天璋院(篤姫)像

鹿児島市の魅力を発信するための各種の重点戦略を構築し、具体的な事業を展開してきている。それら重点戦略・事業の内容は多岐に渡るが、キーワードを集約すれば「独自の歴史(維新・近代史)」「独自の食文化」「独自の自然環境」の活用と発信となるだろう。鹿児島市では新幹線全線開業に先駆け、そうした特質を観光客に深く広く体感してもらおうための「まち歩き楽しみ」や「体験型メニュー」を数多く用意するとともにまち並み整備も着々と進めてきた。

例えば「歴史ロード」維新ふるさと道」は、幕末維新の薩摩藩の動きを立体的に体感できる「維新ふるさと館」を中心にした、甲突川の左岸緑地を散歩コースとして整備した事業だ(平成22年3月完成)。やはり整備の進む甲突川の右岸には観光交流スペースや休憩、飲食スペースなどを備えた観光交流センターを建設(平成22年8月完成)。オーブンテラス等も整備した。

さらに幕末維新の歴史エピソードを人物像と説明板で解説する観光オブジェ(市内7カ所)を整備したほか、鶴丸城址・県歴史資料セ

ンター黎明館前庭に天璋院(篤姫)像をそれぞれ設置し、観光客の人気を集めている。

鹿児島市のシンボルであると同時に最大の観光資源である桜島の整備も「桜島観光振興プラン」(平成18年度策定)に基づき、平成19年度から着々と進められてきた。

鹿児島港からわずか15分で渡れる桜島の人気はこれまでも非常に高かった。さらに噴煙を間近で見られる人気スポット・湯之平展望所のリニューアル(平成21年5月完成)や、さまざまな形態の溶岩に囲まれた「溶岩なぎさ遊歩道」(出発点の公園への足湯設置(平成20年10月完成))などが行われたことにより、新幹線全線開業後に急増が予測される観光客への受け入れ態勢は万全だ。中でも海越しに対岸の鹿児島市街を遠望できる足湯のロケーションは素晴らしい。



幕末維新の薩摩藩の動きがすべて分かる「維新ふるさと館」



甲突川右岸緑地に完成した観光交流センター

新幹線全線開業を前に「独自の食文化」発信のシミュレーションとなった感のあるイベント事業としては、美味のまち鹿児島「薩摩美味(うんまか)維新」のプレイベントを挙げることができる。

「美味のまち鹿児島」「薩摩美味(うんまか)維新」は「黒豚・黒牛・黒酢」などに代表される

また海外も含めた各地開催の物産展などでの森市長によるトップセールスの実施、さまざまな媒体を駆使した宣伝戦略、観光キャンペーンの実施、年間を通じて温暖な気候を生かしたスポーツ合宿や修学旅行の誘致活動など、まさに「鹿児島市を挙げて、考え得る限りの努力を、できる限り実施」(森市長)してきたといえる。新幹線の全線開業を目前に控え、前述した鹿児島市中心市街地にみまざる現在の活気は、こうした地道な努力の積み重ねの効果が、着実に浸透しつつあることを物語るものだろう。

三都市連携のさまざまな期待と効果

九州新幹線全線開業の「効果」は、終始発駅である鹿児島市を活性化させるだけではない。ほかの新幹線の前例を見ても明白のように、全線開業は沿線に位置する都市による新たな都市間競争の幕開けでもあり、時にその「効果」がマイナス方向に働く側面も予測される。例えば九州新幹線によって、鹿児島中央駅



バリアフリーの新型車両を導入した市電

と博多駅は最速1時間19分で結ばれ、鹿児島市・福岡市は完全な通勤・通学圏となる。

「これまで本州から福岡に来ていた観光客がもう少し足を延ばして鹿児島にも行こうという興味を持っていただけの可能性が大きく開けた半面、鹿児島市に支社を置いていた企業の中には、福岡市に支社機能を集約するというような動きが出てくるかもしれません。鹿児島市の労働力が福岡市に流れる可能性だってあります。あるいはその逆の動きもないとはいえないですね。実際問題として、九州新幹線の全線開業は確かに良いところばかりではなく、マイナス面もあるのです。しかし念願の新幹線が全線開業することの意義や意味を差し置いて、マイナス面をただ数え上げていくだけでは活性化するものもしくくなります。むしろそうしたマイナス面を払拭するためにも、プラス面を徹底的に享受するべく、前向きに進むことが必要だと考えます」(森市長)

独特の食文化を持つ鹿児島市の魅力を、イベントやキャンペーンなどによってさらに拡大・発展させることを目的とする取り組み(森市長)だ。イベント本番は新幹線全線開業直後の最初の週末(3月19・20日、いづろ・天文館地区)に開催されるが、鹿児島市の食文化に関するシンポジウムやワークショップ、新メニューの披露、そしてプレイベントが平成21年秋から何度かに分けて開催されてきた。

そのほか、都市と農村の交流促進や観光農業振興を目指す鹿児島市観光農業公園の整備(平成24年度供用開始予定)、グリーンツーリズムの推進、中心市街地の観光スポットをライトアップするファンタスティックイルミネーション推進事業(平成17年度・21年度)、平川動物公園リニューアル事業(平成21年度・27年度)、市内観光地を専用バスで巡るカゴシマシティビュー事業など、新幹線全線開

(鹿児島県)



桜島フェリー初の電気推進船でスーパーエコシップの新船「サクラエンジェル」(3月10日就航予定)

海外(特に東アジア)へのプロモーションや情報発信の強化を活動目標の一つとしているが、2月には早速、韓国ソウル市で三都市連携のプロモーション(観光振興・物産紹介など)を実施してきた。

それらの活動のすべては三都市の市長が出席するトップセールスになるわけだが、森市長単独でも、鹿児島市の情報発信を目的とするトップセールスを積極的に実施している。

中でも大きな話題になったのが、平成22年12月3日と4日、森市長が鹿児島市の観光PRキャラバン隊「薩摩観光維新隊」を率いて青森市で実施したトップセールスだろう。森市長は翌日に東北新幹線全線開業を控える鹿内博青森市長を敬訪問し、全線開業当日の4日に青森市の新幹線開業イベント「うまし



リニューアル工事が進む平川動物公園には桜島を望む足湯も完備

平成20年8月に締結された「鹿児島市・熊本市・福岡市三都市交流連携協定」(以下、三都市連携)は、まさにそうした発想の下に企画された。都市間競争のマイナス面以上に、プラス面を見据えた試みともいえるだろう。

地域主権・地方分権改革の進展や道州制の議論をはじめ、近年、国と地方の役割が大きく見直されようとしている。年を追うにつれ、直接的な住民サービスを担う市町村の役割は大きくなるばかりだ。少子高齢化や人口減少時代の本格化による財政難のさらなる進展に悩まされるとともに、高度情報化やポータル時代に対応した自立的かつ臨機応変な都市経営の必要性などにも迫られ、都市を巡る社会的環境が大きく揺らぎ始めている。

それは特にリーダーシップの発露を周囲から期待される県都において顕著になりがちだ。そうした危機感を共通認識として持っていた森博幸鹿児島市長・幸山政史熊本市長・吉田宏福岡市長(締結当時。平成22年12月か

らは高島宗一郎市長)は、九州新幹線・鹿児島ルート全線開業で都市が一本に結ばれるのを契機に、多角的な観点から連携・協力を深めていくことで意見が一致。締結の席上、三都市の密接な交流・連携を、三都市だけでなく、九州のすべての市町村の浮揚のきっかけとすることが確認された。



幕末維新史を立体的に説明する「時標(ときしるべ)」と「まち歩き観光ステーション」は鹿児島散歩のオアシス

九州新幹線の全線開業が契機ということもあって、この三都市連携は観光振興が主体と思われがちだが、次に示すように、協定の目的と連携項目は非常に幅が広い。

(1) 市政の共通課題に係る共同調査・研究などに関すること。

(2) 市民の交流促進に関すること。

(3) 観光振興などに向けた施策推進に関すること。

(4) 地域資源の相互活用などに関すること。

(5) その他、三市が協議して必要と認める事項。

観光振興に関しては、もともと構成する協議会(九州縦断県都観光ルート協議会)による東アジアへのプロモーション活動や旅行関係者の招へい事業など、連携事業が既に行われていた。協議会によるこうした観光連携事業は引き続き行いながら、新たに発足した三都市連携では、観光振興も含めあらゆる分野で三都市の共通点を見出し、協力し合っていくことになる。

「既に三都市の施設入場券の共通割引制度をつくったり、三都市をPRする共同プロモーション活動を行うなど、具体的な活動も着々と始まっています。今後は三都市に共通する課題として、特に環境施策にかかわる施策、協議会が行ってきた東アジアを対象とする観光プロモーションの強化、地場産業の全国発信などに力を入れていきたいと考えております」(森市長)

森市長は鹿児島市・熊本市・福岡市の三都市連携を「九州における背骨(縦軸)の強化」だとも表現する。そして今後は、この背骨(縦軸)の強化を新幹線全線開業後の各都市の活性化に結び付けるとともに、九州全体の活性化および浮揚に結び付けようとする意識が大切だと力説する。

国内外を問わない大交流時代の幕開け

三都市連携は前述のように、今後、さら

たのし「青森正直市」に薩摩観光維新隊を率いて参加。鹿児島市のPRを大いに展開した。

「今回の九州新幹線の全線開業の意義は、単に九州新幹線を意識するだけではとらえられません。九州新幹線の開通による鹿児島および九州の活性化の実現を基本目標にしながらも、これによって本州最北の青森から九州最南端の鹿児島までの約2000kmが高速鉄道で一本に結ばれたのだということの意義を、もつと日本全体が考えるべきではないでしょうか。日本国民はもとより、このような高速鉄道網の高度な充実化は、海外からの観光客にも大きなアピールとなるはずです。青森市でのトップセールスには、私なりのそんなメッセージを込めさせていただいたつもりです」(森市長)

今のところもちろん、新青森〜鹿児島中央間が一本の列車で走破できるわけではない。しかし、本州の最北端の青森と九州の最南端の鹿児島が新幹線という一本の動脈で結ばれたことは絶対的な事実である。

例えば新幹線を利用して出張する場合、これまで1泊コースだった新青森〜東京が3時間10分(3月5日の「はやぶさ」運行開始後)、新大阪〜鹿児島中央間は3時間45分と、共に日帰りコースになる。また新青森〜新大阪間は約5時間40分(「はやぶさ」と「のぞみ」を乗り継いだ場合)、名古屋〜鹿児島中央間(「さくら」と「のぞみ」を乗り継いだ場合)は約4時間30分と、これもまた無理をすれば日帰



九州新幹線全線開業後3月〜5月まで開催される「第28回都市緑化かごしまフェア」のマスコットキャラクター「ぐりぶー」

りは可能だ。

ちなみに東京〜鹿児島中央間は約6時間30分(「のぞみ」と「さくら」を乗り継いだ場合)で結ばれることになる。日帰りは無理にしても、これまで東京〜博多間を新幹線利用していた人にとっては、ほんのひと足延ばしただけで鹿児島にまで行けるといふ具合に、鉄道旅行の在り方ががらりと変わるだろう。

そのことによって生じる「人・モノ・情報」の交流の在り方も、当然、これまでとは大きく変わってくるはずだ。

森市長の言葉を借りるならば、本州最北端の青森と九州最南端の鹿児島が高速鉄道で結ばれたことによって現出するのは「単なる交流時代」ではなく、海外からの関心をも含めた大交流時代」ということになる。九州新幹線全線開業後のまちづくりは、すなわち本州・九州が一本化された後のまちづくりでもある。

鹿児島市が着々と準備してきた九州新幹線全線開業後のまちづくりに向けた施策が、実際に全線開業した後、さらにどう進化していくのか。今からその展開が非常に楽しみである。

(取材・文 遠藤 隆)